

# 明日の日本のために 平成23年5月25日

資料提供 岡山県議会議員 波多 洋治

メルマガ「蘇れ美しい日本」より

## ◎西村修平 「水の惑星」に生きる宿命

13.5億立方kmの水で地表の71%が覆われている惑星は、天文学上、知る限りでは地球のみである。

人間はもとより、地球上の全ての生物は水によって育まれているのだ。

人間が宇宙から地球をこの眼で見た最初（1961年4月12日）の一声は「地球は青かった」（ガガーリン）とされているが、この青こそ地表を覆う水である。

この地球は「水の惑星」、これ以上に的確な表現があるだろうか。

そしてこの「水の惑星」においても、我々が住む日本列島は周囲を広きに渡って海に囲まれ、且つ奇跡的とも言える地理的条件の下、豊かな降雨量に恵まれた地球上のオアシスと言っても過言ではない。

我々はこの水に全存在を、全存在とは生死であり、その生死を委ねている。委ねるのではなく握られているのである。いや、人間とは水と言ってもいい。

その水がある一定の条件で、津波に転化して凶暴な様相で自らが育てている人間を抹殺するのである。この度の東日本大震災の大津波だが、どのような兵器を使用したところで、これほどまで広範囲に渡り、完璧に破戒の限りを成し遂げることが出来るだろうか。

津波はもとより、幼児の水鉄砲に始まって、巨大な水力発電、果ては原発までが。水に関わっている。これほど様々な形態として変化し、不思議で扱いきれない物体が他にあるだろうか。

夢にもこの水を、意のままにコントロールしているような思い上がりに陥ってはならない。人間は水に共存して頂いているのである。

ましてやこの水の惑星を、日本列島という地球のオアシスを核物質で汚染するなど許されない。「低濃度」のロジックで、福島第一の事故を誤魔化してはならないし、これは原発の是非を問う以前の問題である。

戒めのごとく止まる一本の松は檻樓（らんる）の姿さらして

※檻樓：ボロ切れ、あて布

一本の松は記憶す跡形もなき六千本の白砂青松

## ◎南丘喜八郎

### 『月刊日本』創刊十五年 独立不羈の覚悟 ——日本国の自立と再生を目指して

『月刊日本』創刊から15年目である。この機に、改めて言論誌としての覚悟を披瀝しておきたい。

『月刊日本』の題号は、明治22年に陸羯南が創刊した新聞『日本』の響みに倣ったものである。

陸羯南は『日本』紙上において、薩長藩閥の強権政府に対し「国民主義」を掲げ、筆鋒鋭く迫った。陸羯南は権力者に決して阿ることなく、独立不羈のジャーナリストとして、堂々の言論を展開した。口先では羯南より勇ましい言辞を弄する自由民権論者は少なくなかったが、彼らの大半は仇敵の如く罵っていた藩閥政治家と平気で手を握った。

羯南は『日本』紙上において、伊藤博文・黒田清隆・山県有朋・桂太郎などの歴代藩閥内閣に対し、的確かつ厳しい批判を書き続けた結果、創刊の明治22年から38年にかけて、合計31回、233日にも及ぶ発行停止の処分を受けた。

羯南は度重なる発行停止処分について、こう記している。

「而して彼らが斯くまで停止権を行使したる其の事由を求むれば、治安を妨害すと認むと称すと雖ども、其の実は自己の政策に反対する言論の気焰を殺ぐの邪心に外ならざりし」

羯南は創刊翌年の明治23年10月22日から5日間にわたって、「新聞記者論」を書き、己の覚悟をこう披瀝している。「眼中に国家を置き、自ら進んで其の犠牲になるの覚悟あらざれば不可なり。独立的記者の頭上に在るものは唯だ道理のみ、唯だ其の信ずる所の道理のみ、唯だ国に対する公義心のみ。其他に牽制を受くるべきものあらざるなり故に機関紙的記者に比して其筆は自由なり。而して營業的記者に比しては一定の識見あるだけそれだけ不自由なり」

言論人陸羯南は、この「覚悟」を如何にして獲得したのか。

羯南は安政4年（1857）青森県弘前に生まれた。羯南は東奥義塾を中退して仙台の師範学校に学んだが、1年で退学、上京して司法省法学校に入学した。ここで、原敬や、後に新聞『日本』で活躍する福本日南、国分青涯

などと親交を結ぶ。しかし、羯南や原など賊藩出身者は薩長の学校幹部から差別扱いされ当局と衝突、遂には退学の已むなきに到る。辺境・津軽出身の羯南の生まれ持った叛逆の血と独立不羈の性格は、若い時から存分に発揮された。

当時、西南戦争の凱旋を見た羯南は、次の詩を詠んでいる。

大途は車馬正に喧？ / 万戸旗を掲げて吉辰を祝す  
誰か知る京城歓呼の日 / 寒村なお飢人の訴うるあるを

寒村・津軽に生まれ育った羯南の目は、常に弱き者、押し潰されそうな状況下で生きる農民の姿が映じていた。

その後、紆余曲折を経て北海道の精糖工場に勤めるが、鬱鬱として楽しまなかった。この時に詠んだ歌だ。

胸に満つるの志ありて荒陬に滞る / 是れ謫居ならず亦自ら憂う  
起って帝京を望めば暮雲白し / 大呼、酒を命じてまた楼に登る

明治14年、羯南は意を決して上京、太政官文書局の役人になり、フランス語の翻訳で生計をたてるが、条約改正に対する国民の反対運動が高まった明治21年、決然として官を辞した。

明治21年4月、新聞『東京電報』を興し、翌年これを『日本』と改題した。時に羯南、33歳だった。

羯南は『日本』の「創刊の辞」に、こう記している。

「徳操勇氣の以て其本領を保つなく、唯だ勢に趨り、俗に媚るは自立の道にあらざるなり。一個人と一国民とに論なく、苟も自立の資を備ふる者は、必ず毅然侵す可らざるの本領を保を要す。近世の日本の其本領を失ひ、自ら固有の事物を棄るの極、殆ど全国民を挙げて泰西に帰化せんとし、日本と名づくる此島地は漸く將に輿地図の上にただ空名を懸くるのみならんとす。（中略）『日本』は自揣らず此漂揺せる日本を救ひて安固なる日本と為さんことを期し、先ず日本の一旦忘失せる『国民精神』を回復し、且つ之を發揚せんことを以て自ら任ず」

創刊された『日本』が、連日のように論じたのは「条約改正問題」だ。羯南は政府案反対の急先鋒だった。政府による度重なる発行停止処分は「俗に媚るは自立の道にあらざるなり」との羯南への恫喝であったのだ。勿論、羯南は毅然とし権力者に怯むことなど決してなかった。硬骨漢・羯南の率いる新聞『日本』には三宅雪嶺、福本日南、国分青涯、中村不折、正岡子規、長谷川如是閑など数多くのジャーナリストが集った。

『月刊日本』は、陸羯南の響みに倣い、権力に阿らず、俗に流されず、毅然として正論を吐き続ける覚悟である。